



書評同人 直 平松洋子 山内昌之  
Tadashi Karube Yoko Hiramatsu Masayuki Yamauchi

# 欧州の難民対策から 学ぶべきこと。

世界の人は、どことなくグローバルゼーションが底をついてきていると感じ始めた。トッドは新著『問題は英国ではない、EUなのだ』で、米国の大統領選挙を通して見ても、不平等の拡大、支配的な白人グループにおける死亡率の上昇、社会不安の一般化によって、ナショナルな方向への揺り戻しが始まったと述べる。英国のEU離脱は、欧州統合がグローバルゼーションという全世界的プロ

ジェクトのものはや地方版に過ぎず、留まる意義を見出せないことから生じた、と言っている。

というのも欧州は、米英に追隨した経済的グローバルゼーションの上に、各家の政治的廃止というイデオロギーの夢を重ねることで、グローバルゼーションの作用を悪化させたからである。

英仏と日本とドイツの出生率についても、常識的ではあるが、的確な比較を試

みている。英仏は人口が増えもせず減りもしないバランスのとれた状態にある。高齢化している日本は、国民の同質性を重んじるあまり、人手不足の問題解決をテクノロジに求めている。

これとは対照的にドイツは、大国にふさわしいパワーの追求を諦めず、信じがたいほど冒険主義的な労働力輸入政策に打って出ている。この意味で、ドイツが周辺地域のいたるところで国境と国家の

流から消えたフランスでは、個人がますます超個人主義になってしまい、抛り所を失ったフランスの支配階級は、自己陶酔的な肯定の場を反イスラームに求めるきらいもある。憂慮されるのは、中産階級が、移民や若者といった下位の階級に利己的な態度を取っていることだ。

そもそもフランスは、もともと国内が無秩序であり、フランス人同士でも互いにいざこざは絶えない。トッドは、外国から異質な要素が入って来ても、失う「パーフェクトな状態」がないタフな社会だと定義する。

他方、トッドの日本観はかなり肯定的に中っている。日本は「非常に排外的で差別主義的」なわけではなく、「仲間同士で暮らしている状態が非常に幸せなので、その現状を守ろうとしているだけではないでしようか」と。互いを慮り、迷惑をかけないようにするといった意味では、「完成されたパーフェクトな世界」ではないかと洞察するのだ。

この関連で言えば、難民はフランスにせよ、日本にせよ、ドイツにせよ、まさに社会と国際関係の安定を望む社会にとって、すこぶる厄介な要因なのである。難民を考えるときに有効なのは、「人口移動の流れ」という観点であろう。墓田桂『難民問題』は、貧しいエジプトでさえシリア難民の目的地であり、EUへの経路であり、より豊かなトルコも同



問題は英国ではない、EUなのだ 21世紀の新・国家論 エマニュエル・トッド 堀茂樹 訳 文春新書/896円

山内昌之 明治大学特任教授、東京大学名誉教授・国際関係史



難民問題 イスラム圏の動揺、EUの苦悩、日本の課題 墓田桂/中公新書/929円

様だと指摘する。とりあえず難民が流入する近隣諸国の負担はもつと大変である。人口比であれば、レバノンの人口千人当たりの難民数は百八十三人であり、世界最多の難民吸収率である。しかも、そこにはパレスチナ難民が入っていない。次位はヨルダンであり、八十七人である。レバノン人口の五分の一をシリア難民が占めているという指摘は分かりやすく、痛切な響きを帯びている。

リビアが混乱の始まる二〇一一年以前から、エリトリア人など人口移動の集約地であり、欧州への出航地だった事実はまだあまり知られていない。一年の時点

で、リビアにいた非正規移動者の数は百万から二百万と見積もられていた。リビアの全人口は六百四十六万人にすぎなかった時期でさえ、人口過剰だったのである。トルコなど中東の難民政策を批判する国連やEUの姿勢には、虚偽とは言わずとも偽善を感じざるを得ない。この点では、トッドの見方と墓田氏の見解には共通する面もある。

ところで、日本は難民の受け入れに閉鎖的であり、世論も消極的だと言われることも多い。二〇一五年に法務省が難民として認定した数は二十七人にすぎないことを見れば、確かに消極的だと言える

意味をなくしているという指摘は興味深い。果たして、ウクライナや中東では、アメリカの「無力な軍隊装備」よりも、ドイツの経済パワーのほうが重きを成しつつあるというのだ。

いずれにせよ、統合欧州を理解するキーワードは、難民とイスラームかもしれない。二〇一五年一月のテロをめぐって起こった「私はシャルリ・エブド」のメッセージと運動は、差別されている弱者グループの宗教の預言者ムハンマドを冒瀆する、無自覚な差別主義の発露だと手厳しい。確かに、カトリックが社会の本

だろう。しかし、就労目的の難民申請も多く、偽装申請もかなり多い。帰国が迫った技能実習生も、たとえ偽装であっても難民申請をすれば在留延長が認められるケースが多い。いきおい、難民申請者が難民性の低い人で占められるために、公表される難民認定率も低くなったのは当然だといえる。結局、難民認定制度が事実上の移民制度となっており、比較的安全なアジアの国の出身者が多いのが日本の特徴なのだ。

二〇一五年に難民支援策を表明した安倍首相三首相であっても、シリア難民の受け入れを認めなかった。これについては、国連に勤務した緒方貞子氏が「リスクなしに良いことなんてできませんよ」と批判的であった。墓田氏は、安全とリスクの管理は政治家の責務であり、やみくもに積極的な国際協力を行えばよいというものでないと慎重である。そして、緒方氏の「軽率な発言」と比較して、安倍首相の「慎重姿勢」にもそれなりの理由があったと同情するのである。

結局、「人道大国」になれない日本の限界を恫慄に考察した本書は、あまり日本人の耳に心地よく響く内容ではない。しかし、北朝鮮や中国からの難民が大挙して到来する事態を公海や領海でいかに阻止するのか、あるいは受け入れるのか。墓田氏のリアリズムには学ぶべき点が多い。